り貞享三年（一六八六）上洛して上原道悦に医術を学んだ。元禄二年（一六八九）二月琉球に渡り、同四年（一六八七）秋に鹿児島に帰った。翌五年（一六八八）再度上洛して、北尾芳庵法師に医学を学んでいる。

このことから徳明から学んだ医術の概要については、道与の口から直接京都の医師にも伝えられた可能性も否定することは出来ない。

（弘前大学医学部麻酔科）

赤穂義士を支援した元赤穂藩医・寺井玄渓

木下　勤

寺井玄渓は、赤穂義士から列外の同志として信頼された元赤穂藩医である。父祖は三河の武士で父の代までは本多出雲守政利に仕え、主家改易により浪人となった。玄渓は京都へ出て町医を開業、その経歴などは不詳であるが桐庵と号した。元禄十三年赤穂藩の筆頭藩医として、藩主内匠頭長矩に仕えた。時既に七十九歳。赤穂藩が何故にこの老医を召抱えたか、その経緯についても不明である。前任者の口分田（くもで）玄瑞は長矩の持病・痞（浅野家ではこれを御痞気（ごふき）といった）を治すには玄渓が最適任であると考えて推挙した故であろうと推測される。

元禄十四年三月十四日江戸城松之大廊下において長矩が吉良上野介へ刃傷に及ぶという事件が起きた。事件当日も薬湯を進めた玄渓は、人一倍自責の念にかられ、急ぎ赤穂

へ帰り、家老大石内蔵助に涙ながらに深く詫びたという。

程なく、息玄達の住む京都へ帰り、診療を助ける傍ら後から続々と上洛してくる浪士の世話を引き受けた。のち玄達と別れて円山の一角長楽寺下に居を移し、同志会合の場所として提供、また京都と江戸の秘密文書の中継を引き受けたり、労を惜しまず物心両面にわたって支援した。勿論内蔵助も山科から京へ出る度に訪ねて来ては情報を交換していた。

翌十五年七月二十八日仇討ち決行のための最終会議が、玄渓宅近くの円山安養寺塔頭で開かれた。世にいう円山会議である。

いよいよ、同志一党は次々と東下りして行くことになり、玄渓も同行せんと主張して止まない。内蔵助は遂に一書を送り出府を留めた。それでは、せめて伴玄達をお連れ願いたい。ご一党の病気、怪我の治療や使い番だけでもお役に立たせたいとの申出に、内蔵助もその好意を謝して同行を許した。玄達は江戸で同志の連絡役と病気の治療に当った。討入りに際しては全員が、呼吸の乱れを防ぐ目的で「息合(いきあい)」の丸薬を口に含んで戦った。この薬を調合してつくったのも玄達である。これは義挙勝因の一つであって特筆すべきであろう。

内蔵助の一行は十月七日京を発った。出発が遅れたのは身辺その他の整理で過労が続き、もともと彼は冷え症の体質であまり頑丈なほうではなかったので、またもや左の腕に疔腫ができ熱発したからである。またもやというのは前年赤穂開城の後でも左腕(両腕ともいう)に疔ができて寝込んだ。その時は口分田玄瑞らが手当をしたが、今度は玄渓が懸命に療治して程なく全快した。因に、赤穂で罹病した時の様子を岳父石束源五兵衛へ手紙で知らせているが、当時の医療水準が何となくうかがえる文面である。

出発当日、内蔵助は見送りに来た身重の愛妾お軽のことを同じく見送りに来た玄渓へ托したが、再び江戸から手紙で、生れてくる子の将来を頼み「それのみが冥途へのさわり云々」と心情を吐露している。内蔵助は玄渓にはどんな秘密でも打ち明けていたと見えて、随分とはっきり書いた手紙が残っている。討入り前日にも忙しい中を長文の手紙で知らせている。また吉田忠左衛門、小野寺十内、原惣右衛門、その他の同志からの手紙も多い。

討入り後、十二月二十四日付で『討入実況覚書』を内蔵助、原惣右衛門、小野寺十内の連名で一通は玄渓へ、一通は元江戸詰藩医内海道憶へ送っている。これは義士資料中最も信頼に足る貴重なものであるという。内蔵助は別に『討入当日品々を贈るの状』『討入手分書』『去年以来志浅深之働之次第』『浅野内匠頭家来口上』などを玄渓へ送った。また前原伊助は『赤城盟伝』を著わし玄渓へ送った。翌十六年二月三日切腹の前日には大石、原、小野寺連名で絶筆を玄渓へ送っている。

のち玄渓は、内蔵助の委託に応え、遺族の面倒を見て回り、遺児赦免運動に力を尽した。伝え聞いた諸国の大名は、玄渓を高禄で召抱えんとしたが一切固辞して受けず「人世ハ夢ナリ」の感を深くして住居近くの自然石に『夢』の字を彫ったという。この石は現在、円山公園内に残っている。

宝永八年（一七一一）二月二十日京都に歿す。年九十歳。墓は長楽寺墓地、頼山陽父子の墓の近くにあり、墓碑名桐庵玄渓居士。墓の前には先代住職華山和尚の建立した碑文がある。なお三宅観瀾は『烈士報讐録』を著わすに当り、玄渓に聴しその正確を期したという。

（木下医院）